

皆さま

謹賀新年

今年もよろしく願いいたします。

今回はパレルモ紀行です。

食については触れていませんが、もちろん good. Cela va de soi です。

街に魚屋が多いですね。英国の田舎で見るぐったりしたのとは違って新鮮に見えます。良く冷えた白ワインでのマグロのたたき風ステーキが最高でした。ただパレルモは遠い。ダラムが田舎ですので、行きも帰りもミラノに一泊です。ミラノのレストランでビックリしたのはそこそこの店で、厨房やサーブに中国人が多いことです。厨房での皿洗いではなく、何とパスタをクックしてます。中国人がですよ。これにはがっかりしました。

昔 Les Chinois à paris という映画がありました。今有名になっている長塚何某という日本人の俳優が主演したフランス映画ですが、中国人がパリを占領してしまうという内容だったと思います。今の勢いですと、Les Chinois en Europe は冗談とはいえない近未来かもしれません。

増淵 文規

英国ダラム便り（その9）

[シチリア・パレルモ]

年末の3日間をパレルモで過ごしました。ビザンチンやイスラム文化を取り入れ、東方との交易でその昔大いに栄えた都市です。勿論イタリア風の町並みですが、今もどことなくアラブ的なにおいがします。曲がりくねった細い小路一杯に並ぶ屋台露天商はスーク（アラブの市場）のようですし、昔はイスラムのモスクだったと思われる円形ドームを乗つけたキリスト教会も多く見られて、普通の欧州都市とはちょっと趣が違います。

11世紀の終わりから12世紀にシチリア王国ができて、パレルモはビザンチン/イスラム/ラテン文化を融合させた、当時の欧州で最も華麗とも言える文化都市だったようです。シチリアは古くはギリシャ人の植民が進んでいた地域です。フェニキア人やローマ帝国の支

配の後、8～10世紀にかけてアラブ化します。11世紀末、フランス・ノルマンディーからやってきたノルマン人（ヴァイキング系フランス人）が独自の王国を作ってしまいました。

8世紀ごろから欧州各国はヴァイキングの襲撃に悩まされ、フランスのシャルル3世は「頼むからパリの近くまで荒らすのはやめてくれ」ということで、911年にデーン人の一部族長ロロに土地を与えます。これがノルマンディー。ロロの直系の子孫が1066年のノルマン・コンケストで有名なウィリアム1世ですね。このウィリアムの家臣団にオートヴィル家があって、外国人傭兵として混乱の南イタリアに出稼ぎに行き、1070年ごろにはイタリア半島最南端とシチリアを乗っ取ってしまいます。遠く離れたノルマンディーから南イタリアまで最初は恐らく20～30人程度の軍団で出かけて行ったのでしょう。ウィリアムは海を渡って英国を征服し、同時期に家臣のオートヴィル家はシチリア王国を建てる。何というエネルギーでしょう。あるいは荒くれ男のロマンなのか。ヴァイキングというと凶暴、残忍な海賊のイメージが強過ぎますが、英国社会の基礎を作ったと言われるウィリアムとシチリア文化を花咲かせたオートヴィル家を見ていると、文化的にも大変な優れものだったという気がします。

シチリア王朝（ノルマン王朝）の成立は1130年。3代続いて1194年には神聖ローマ帝国に屈しますので、短い栄華でした。側近、官僚、財政顧問団などにユダヤ人、イスラム教徒、ギリシャ人を積極活用し、彼らの独自文化・宗教にも大変寛容であったことから、コスモポリタンのような独特な文化が醸成されたようです。12世紀末にこの地を訪れたスペイン人旅行家イヴン・ジュバイルがパレルモ紀行を残していて、黄金色モザイクに輝く教会を世界一の美しさと絶賛し、又、イスラム教への寛容度に感心しています。

現在のパレルモ観光でも欠かせないのが、ノルマン王宮やいくつかの教会に残るビザンチン風のモザイク壁画です。大体12世紀の半ばに描かれたものです。主として金地を背景に旧約・新約聖書の物語で内部壁面と円蓋部分が一杯に埋め尽くされています。天井の木張り部分や床にアラブ文様が多いのも特徴です。

奥州藤原氏3代が栄華を誇ったのがシチリア王朝と同じ時期です。パレルモの王宮礼拝堂や教会は、外側ではなく内部が黄金色モザイクに輝く「金色堂」のようでもあります。

オートヴィル・ノルマン王朝は3代で終わるわけですが、翌13世紀の前半神聖ローマ帝国フリードリッヒ2世のときにパレルモ王宮は文化的に最も輝いたようです。中世随一の英明王と言われるフリードリッヒはオートヴィル家直系の母のもと、パレルモで生まれ育った人物です。皇帝となった後も大半の施政はパレルモの王宮で行っていたようです。芸術、文学、科学とあらゆる学問に通じ、アラビア語を含め数カ国語に堪能だったと言われます。特にアラビア語については、十字軍の遠征で敵のサラセン王とアラビア語で交渉、書簡のやり取りをし、無血でエルサレムの奪還に成功したという話は本当のようです。当

時のパレルモ王宮には欧州中の一流学者、芸術家が集まり、欧州一の文化サロンだったと言われています。あの中世に信じられない思いです。残念ながらフリードリッヒ2世ゆかりの建造物などを見ることはできませんでした。そういうものは余り残していないのかもしれない。ハードの人ではなくソフト面での傑物だったのでしょうか。

今回のパレルモ行きはモザイク画観賞やモスLEM風教会を見つけることが目的でしたが、ノルマン王宮やいくつかの教会がノルマン・フレンチ（ロマネスク）建築で、ダラム大聖堂の左右の塔とよく似た作りだったのには何か懐かしさを感じました。

[ダラム古城でのクリスマス・ランチ]

12月25日にダラム大学古城レストラン（世界文化遺産の古城は大学の所有）でのクリスマス・ランチに参加しました。この時期故郷に戻れない学生のための企画で、9割以上は中国人でした（帝京の学生は地方でホームステイ中のため不参加）。学生コーラスの聖歌合唱もあり、普段と違った豪華な料理に、古城巡りツアーもありと盛りだくさんで、中国人留学生たちの嬉しそうな表情が印象的でした。主催者は副学長ですが、粋なはからいですね。ダラム大学の各カレッジの学食は、学生の3度の食事以外に各種セレモニー・行事・接待用に使われており、一般的な日本の学食のイメージとは異なります。カレッジの校長は食事の質にいつも目を光らせていますし、厨房スタッフへの指導・注文も細かい。重要行事の食事の最後に厨房長とスタッフが呼ばれ、客の前で校長がねぎらいの言葉をかけるシーンを良く見かけます。現業スタッフへの心配りはさすが英国です。

2013年1月10日

増渕 文規